

ご挨拶

心臓血管研究所附属病院 心臓血管外科部長 國原 孝



わたしはもともと東京で生まれ育ったのですが、1991年に北海道大学医学部を卒業後、当時の第二外科・循環器外科に入局。両科のローテーションを通じて外科医の基礎となる素養を十分学んだ後、1995年より北海道大学病院循環器外科で安田慶秀名誉教授の指導の下、心臓血管外科医として十分なトレーニングを積みさせていただきました。しかしさらなる技術の向上を目指していたところ、幸運にも2000年夏に心臓血管外科先進国のドイツへ留学する機会を得ました。

そこで目にしたのはまさしく私の心臓血管外科医としての **breakthrough** (現状打破、大きな進歩) でした。Schäfers 教授率いるザールランド大学病院胸部心臓血管外科は実に幅広い分野かつ豊富な心臓血管疾患の治療にあたっており、なかでも大動脈弁形成術は世界でも屈指の症例数を誇っておりました。日本ではまだ未開拓の同手術を数多く経験できたのは私にとって大変有意義でした。ほかにも慢性血栓塞栓性肺高血圧症に対する肺動脈血栓内膜摘除術や、肺移植など、日本では見ることのできなかつた手術に数多く参加させていただいたことは、貴重な経験でした。

2003年春に帰国後、幸い北海道大学病院循環器外科で執刀の機会を与えられ、

満足のいく結果を得られておりましたが、安田慶秀名誉教授退職、松居喜郎新教授誕生も束の間、縁あって2007年4月に再渡独、同病院で再びスタッフとして働く機会に恵まれました。そこでは2013年12月に帰国するまでの6年半で約3300例の手術に参加、うち約1900例で執刀させていただきました。初回留学分を含めると、じつに約4600例の手術に参加したことになります。今回はより高度・複雑な複合病変に対する手術や再手術を数多く執刀させていただき、心臓血管外科医としての技量を確固たるものにできました。

わたしがいままで学んできて、これからも実践しようと思っていることは「ぶれない医療」、木で言えば力強い幹を持つことです。たとえば、冠動脈バイパス術で最も大切なことは「最高のグラフトを用いて確実に長持ちする吻合をすること」で、これが「幹」に当たります。「心臓を止める、止めない」は「枝や葉」に当たります。弁形成術においても同様で、「最適な補強をして確実に長持ちする形成をすること」が「幹」に当たり、「傷の大きい小さい」は「枝や葉」に当たります。「枝や葉」をきれいに切って体裁ばかり気にしていると、新しい科学的根拠が出るたびに右往左往して、「枝や葉」を切り続けなくてはなりません。

「幹」がしっかりしていれば、自分のスタイルはぶれることなく、常に安定した最適な医療を患者さんに提供することができます。このことは「当科の治療方針」の項に詳しく述べておりますのでご覧いただければ幸いです。

今回ありがたいお誘いをいただき、2013年12月9日付けで当院外科部長に就任することになりました。お受けした理由はただひとつです。本邦初の循環器専門病院として、経験豊富なスタッフと環境に恵まれ、自分が経験してきた手術をここでは再現でき、満足のいく成績を得ることができると確信したからです。ここで手術を受けられる患者さんは、高度に専門化したスタッフによる最先端の治療を受け、献身的な看護を受け、最高の環境でリハビリに励むことができ、本当に幸せだと思います。ドイツにはドイツの良い面、悪い面があり、日本もしかりです。両者の良いところをバランス良く取り入れて、いままでの貴重な経験を日本の患者さんに還元できるよう努力してまいりますので、今後も御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

敬具

平成二十六年一月吉日

